



WCRP

Religions for Peace

会報 2025年 **秋** 号

Vol.548



© 吉岡栄一



重蔵神社夏季大祭（輪島市）は、WCRPの能登半島コミュニティ支援プロジェクトが活用され斎行された

Contents

こころの扉——

「繋いでゆくべきこと」香取大信 2

特集：3非武装による戦争のない世界の実現に向けた政治との対話

核兵器廃絶オンラインワークショップ開催 3

広島・長崎原爆慰霊閣連行事に出席 4

平和研究所 研究会報告 4～5

第3期 平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー 6

能登半島コミュニティづくり支援プロジェクト 7

目で見る WCRP 7

新役員紹介 8

第53回理事会を開催 8



公式サイト



こころの扉 The Path to Peace

神社本廳 教化広報部長

香取 大信

繋いでゆくべきこと

令和7年は、我が国にとって終戦80年の節目の年となりました。幸いにも日本はこの80年の間、他国との争いに巻き込まれることはありませんでしたが、ウクライナとロシアによる紛争をはじめ、パレスチナとイスラエル間の諍いなど、世界では様々な形で人間同士の争いが存在し、とりわけ未だ終息の兆しが見えない状況には心を痛めざるを得ません。紛争の背景には民族・経済・政治的な理由といった要因が、複雑に絡み合っていることは承知しています。しかしながら何故人間は愚かな行為と分かっている、武力行使に訴えるのか。またそれを繰り返すのか。理性的な生き物である筈の人間が争いを生み出しているという現実。私たちが生きているこの世界には、実に様々な矛盾が存在していることに気付かされます。此度私は、10数年振りにWCRPの活動に参画する機会を得ました。往時は自らの無力さを痛感するしかありませんでしたが、諸宗教間の英知を結集し、相互対話と協力を通じて紛争和解に向けた活動を継続してゆくことは、非常に価値あることであり、継続してゆくべきこととあらためて感じています。微力ではありますが、気持ちを新たに取組んで参る所存です。

さて、私ども神道人にとりまして、令和15年には第63回神宮式年遷宮を控えています。約1300年前から続く式年遷宮は、20年ごとに社殿、御装束神宝を作り替え、古より受け継がれてきた文化や技術を、遷宮に携わ

る全ての人の心と共に、次代へ伝承してゆく重要な儀式と理解しております。そしてそれを受け継いでゆくのは人であり、後継者の育成も欠かすことの出来ない要件と考えています。近年は人口の減少、少子高齢化による閉塞的な未来観について、マスコミから発信されることも多くなりました。人口の減少化は、宗教界にとっても深刻な問題です。神社界でも地域に根差した神社の護持運営のため、半世紀前から、過疎及び振興対策を展開していますが、地域差もあってなかなか思った通りの成果を出せていないのが実状です。稀に、宗教者の後継問題について話が出るがありますが、私はむしろ、寺社仏閣の護持運営に尽力戴いている、神社であれば氏子、お寺であれば檀家に名を連ねる方々といった、信仰心によって支えて下さっている方々の後継問題についてこそ、考えなくてはならないのではないかと感じています。むしろ各教団でも、既に手段を講じられていることと思いますが、技術や伝統も信仰する心も継ぎ手がいなければ絶えてしまいます。後継者の育成、特に信仰心を持つ方を育ててゆくことは、一朝一夕に結果を出せることではありませんが、継続は力なりであります。一宗教人として、人々の祈りの場を絶やさないようにするために何が出来るか、神社神道の視点から考えて参りたいと感じている次第です。限られた時間の中で何を果たせるかを念頭に、皆さんと共に歩んで参りたく存じます。



3 非武装による戦争のない世界の実現に向けた政治との対話



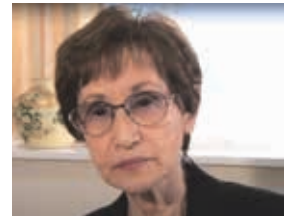
核兵器廃絶 オンラインワークショップ開催

波田スエ子さんの被爆証言 — 平和への祈りを込めて

8月3日、波田スエ子さんが被爆体験を語った。アジア宗教者平和会議（ACRP）後援のもと、WCRP/RfP 日本・オーストラリア・ニュージーランド委員会が共同開催した核兵器廃絶オンラインワークショップでのことで、核兵器被害の記憶と脅威への認識を深め、宗教的・道徳的対応を促すことが目的とされた。

波田さんは、終戦から八十年を経た今もなお、当時の記憶は色あせることなく、平和への強い祈りとともに語り継いでいる。1945年8月6日、広島市の自宅（爆心地から約800m）で被爆。波田さんは当時8歳、姉妹4人を失い、両親も行方不明となる過酷な体験をした。その後、義姉夫婦に引き取られ成長し、結婚・子育てを経て、今は孫・ひ孫に囲まれている。1987年に難病を患い信仰に支

えられた後、1994年から被爆証言を開始。「戦争ほど残酷なものはない」と語り、命の尊さと平和の大切さを伝え続けている。



波田さんの言葉は、私たち一人ひとりが平和のためにできることを考えるきっかけとなるものであった。「戦争ほど残酷なものはありません。どんな理由があっても、決してしてはいけない」。波田さんは、自らの命が「語り伝えるために生かされた命」であると受けとめ、命の尊さと平和の大切さを語り続けている。最後に、「今も戦争をしている国の人々に平安が訪れますように」と静かに祈りを捧げ、会場は深い感動に包まれた。

白い布に色を重ねて

続く若者セッションでは、3か国の学生が登壇。日本からは佼成学園女子高の波田野優さんが、ベトナムのサマーキャンプで15カ国の若者と「白い布に模様を描く体験」をしたことや、広島平和記念資料館で被爆者・波田スエ子さんの証言に触れ、「核兵器が奪うのは人間の尊厳。私たちは平和の模様を未来へ描き続ける責任がある」と語った。

学生らが、過去と現在を接続しつつ、過去のことを

他人のこととせず自分たちの問題であると熱く語る姿に感銘を受けた参加者は少なくなかった。

2日目となる8月10日は、鈴木達治郎教授（長崎大学）が最新の核にまつわる情勢分析などを語り、続いて宗教者の受け止めとして戸松義晴理事長らが登壇した。

2日間のワークショップは、ストップ！核依存タスクフォース責任者の中村憲一郎師（佼成学園理事長）による閉会の祈りにより締めくくられた。



広島・長崎原爆慰霊関連行事に出席

8月6日早朝、広島平和記念公園内にある供養塔前で執り行われた広島戦災供養会主催・広島県宗教連盟奉仕による「原爆死没者慰霊行事」に、日本委員会からストップ！核依存タスクフォース責任者である中村憲一郎師（佼成学園理事長）が参列した。その後、広島県宗教連盟主催の「昼食会」に参加し、宗教者の役割について意見交換を行った。中村師は、「被爆者の高齢化が進む中、いかに次世代にこの核廃絶の願いを継承していくか、



この広島訪問であらためて実感した」と語った。8月7日から8日に行われた長崎県宗教者懇話会主催の平和交流会と第53回原爆殉難者慰霊祭に、日本委員会から戸松義晴理事長とストップ！核依存タスクフォース委員の中西正史師（寒川神社権禰宜）が出席した。戸松理事長は奉読した「慰霊のことば」の中で、「核兵器廃絶を訴え続けておられる被爆者の方々の声に真摯に耳を傾け、その意志をしっかりと引き継いでまいります」と誓った。



平和研究所 研究会報告

2025年度 第2回研究会

日 程：2025年6月19日

発表者：金子昭所員（天理大学おやさと研究所教授）

テーマ 「人間の尊厳」 概念を検討する



「人間の尊厳」を、哲学や法律、倫理の面から整理して、平和との関わりについて述べてみたい。ナチスの収容所では、人は番号で呼ばれ物のように扱われたという。このようなことこそ、尊厳を奪うことの最たる事例だと思う。世界人権宣言や日本国憲法、医療法などにおいて「尊厳」という言葉は、人間を大切にする理念として使われている。哲学的には、トマス・アクィナスからカントに継承される考え方として、尊厳とは「代わりがきかないこと」「目的として尊重されること」「道具扱いされないこと」と整理できる。さらに尊厳には、「自分で決める権利」と「人を物として扱わないこと」という二つの大事な意味がある。生命倫理の場面では、出生や死にかかわってしばしば問題になり、安楽死や尊厳死の議論でも、この二つの考え方がぶつかる場面がある。宗教的には身体は神仏からの預かりものであり、自己決定にも限界があるとされている。平和をめぐる問題では、一人ひとりの人間の尊厳を基盤に「人間の安全保障」問題として、紛争下にある人間、貧困に苦しむ人間、自由やアイデンティティを奪われた人間においては「人間性の尊厳」が失われていると捉え、そこからの回復をめざす視点が重要である。

平和研究所 研究会報告

2025年度 第3回研究会

日 程：2025年7月22日

発表者：竹村牧男所長（東洋大学名誉教授）

テーマ

『人間の尊厳の回復をめざして —— 仏教の立場から』



2025年度の平和研究所のテーマである「人間の尊厳の回復をめざして」を、仏教の立場から考えてみたい。古代インドの社会はカースト制度に縛られていたが、釈尊は其中で人間平等を掲げ、サンガでは出自にとられない共同体を築いていた。ただ、仏教教理の中には三乗思想といって、人々を声聞・縁覚・菩薩と資質によって分け固定的に見る考え方が一般的であった。それに対して一乗思想は「一切衆生悉有仏性」、つまりすべての人が仏になり得ると説いた。その根拠となるのが如来蔵思想であり、『涅槃経』に端を発し、衆生の内に如来の本質が仏性として宿ると示された。『華嚴経』や『勝鬘経』などでも同じく、仏の智慧は誰にでも等しくあるけれど、煩惱に覆われているため修行と信が必要だと説かれている。そして『宝性論』では、仏の法身・真如・種性がすべての衆生に等しく遍満すると体系化された。つまり、人間は本来だれもが仏たり得る存在であり、尊厳はその仏性に根ざしている。こうした如来蔵思想の立場から、あらゆる人々を等しく尊重し、合掌礼拝する立場が開かれるであろう。



2025年度 第4回研究会

日 程：2025年9月9日

発表者：藤本頼生所員（國學院大學教授）

テーマ

国学者賀茂真淵の生涯と思想にみる 「人間」観・「自然」観



「人間の尊厳の回復をめざして」のテーマを受け、江戸中期の国学者・賀茂真淵の思想を通じて、神道・国学における人間観を考察してみる。真淵は朱子学的な作為的道德を批判し、人間の自然な心情や本性を尊重した。彼の説く「ますらをぶり」は、強く、おおらかで、素直な心を大切にする姿勢であり、人間の本来的尊厳を肯定するものであった。真淵が「古道」と呼んだ世界観は、神代から連なる人間本来の在り方を重視し、自然や共同体との調和の中に人間を位置づける。これは神道の「清らかな心」に通じ、作為よりも生得の純真さを尊ぶ観念である。さらに真淵は『万葉集』の研究を通じて、言葉や歌に人間の真情が宿ると考え、文学を人間理解の基盤とした。国学における人間観は、外来思想による規範よりも、固有の自然な生を肯定する姿勢にあり、真淵はその典型的な表現者といえる。その思想は現代において、人間の尊厳を自然や文化との共生のなかで捉え直す視点を提供している。

和解の教育タスクフォース主催



第3期 平和と和解のための ファシリテーター養成セミナー 第4回開催



アイスブレイク



グループワーク

8月30日～31日、立正佼成会法輪閣にて「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」（第3期第4回目）が開催された。今回は『流れをつくる』をテーマに、アクティビティのプランニングを策定し、実施するための手段・方策を学び、実演発表を行った。

1日目は、松井ケティ WCRP 日本委員会理事（清泉女子大学キリスト教文化研究所客員教授）から、分断を和解へ導くアクティビティの立案方法を学び、講義の後グループ討議を行った。感情をつかむことを目的としたプログラムを立案した班はAIを活用し、参加者全員で作った詩を元に歌を作成する工夫を凝らしていた。また、別の班は絵本作成という共同作業を通して、自分が大事にしたい価値観を確認するプログラムを考案。さらに、ある地域に同居している地域住民と、外国人居住者の中で起きる課題に対して、どの様に和解・仲裁をしていくのかを立案した班もあり、多様なプログラムの立案がされた。

夕方には立正佼成会の大聖堂で行われた「イスラエルとパレスチナの平和を願う会」主催によるパイプオルガンの演奏会に参加した。イスラエル国籍のアラブ人で、カトリック・フランススコ会のエルサレム・聖地特別管

区の主席オルガニストである、ヤクーブ・ガザウィ氏が演奏し、参加者はイスラエルとパレスチナの平和を共に願い、音楽や芸術に触れることで人は心を動かされ、行動を起こす力になることを学んだ。

2日目は、班ごとに実演発表を行い、和解の教育タスクフォース委員会メンバーからコメントをもらい、他の班からも良い点と建設的な改善点のコメントをもらい議論した。参加した受講生からは「グループ討議ではアイデアを具体的に描き、プログラムも時間割までイメージをもって詳細に考えられたので良い時間だった」などの感想が挙がった。



アクティビティの実演



能登半島コミュニティづくり支援プロジェクト

WCRP日本委員会は、2024年1月1日に発生した能登半島地震支援のために、今年6月「能登半島コミュニティづくり支援プロジェクト」を立ち上げた。地震発生から1年半が経過し、全国規模の支援NGOの撤退が一部始まったなか、被災地においては、さまざまな小規模団体が主体的にコミュニティ再生・活性化のための取り組みを行っている。このような自らの地域で着実に活動を行っている団体・グループへの支援を行なうためのプロジェクト。公募を行った結果、輪島市と能登町の18団体から応募があり、7月17日の審査会にて18団体、総額270万円の支援を決定した。7月下旬に被災地を訪ね、団体ごとに支援金の贈呈を行った。

それらの団体から、感謝とともに夏に行われた取り組みの報告が届いた。



© 吉岡栄一



© 吉岡栄一



目で見る

WCRP

EVENT 01



アジア太平洋女性信仰者ネットワーク 第1回気候変動セミナー

7月30日、アジア太平洋女性信仰者ネットワークが「化石燃料から再生可能エネルギーへの移行」をテーマに第1回気候変動オンラインセミナーを開催し、信仰者の役割や具体的行動を議論した。

EVENT 02



青年部会「飛脚まらそん」

10月5日、加藤大志副幹事長が禰宜を務める、足の神様・服部天神宮発祥の“令和の飛脚”のお祭り「飛脚まらそん」に谷野創流事務局長（5里）と眞壁希予事務局員（1里）がエントリーし完走した。大谷英玄幹事長らが応援に駆け付けた。

EVENT 03



気候危機学習会 ～COP30へ向けた宗教者のつどい～

10月10日、COP30に向けてオンライン学習会を開催。瀬本正之神父（日本カトリック司教協議会ラウダート・シ部門秘書）、西野文貴博士（株式会社グリーン・エルム代表取締役/神職資格者）、ティア・オルメロド氏（オーストラリア気候変動に対する宗教者レスポンス（ARRCC）代表）の3人から、それぞれの環境哲学や取り組みを語っていただき、最後に日豪共同宣言を採択した。

新役員紹介



香取 大信 理事
(神社本庁教化広報部長)

昭和42年生まれ。平成2年3月、國學院大学文学部神道学科卒業。同4月、株式会社プリンスホテル入社。ホテル勤務を経て、平成9年10月神社本庁入庁。総務・研修・財政・本宗奉賛など複数部署での勤務を経験し、平成20年国際交流課長、平成22年情報管理課長、平成29年財政部長、令和7年7月より教化広報部長。



清水 祥彦 理事
(神田神社宮司)

昭和35年生まれ。昭和58年3月國學院大学文学部神道学科卒業。昭和58年、鶴岡八幡宮に奉職。昭和62年、神田神社(神田明神)に奉職、現在に至る。平成15年から平成23年まで内閣府「災害教訓の継承に関する専門調査会」委員、平成28年から令和7年3月まで東京都神社庁副庁長を歴任。令和元年5月、宗教法人神田神社代表役員宮司就任、現在に至る。令和元年11月、一般社団法人千代田中央文化交流推進機構理事長就任、現在に至る。

第53回理事会を開催

9月11日にオンラインで第53回理事会を開催し、理事18人と監事が出席した。「日本委員会人事」「第3回東京平和円卓会議」「WCRP 運営の改善に向けて」について審議し、全て可決された。日本委員会人事で選任された役員は次の通り。(敬称略)

1. 総合企画委員会委員 (任期：2年、理事会で選任)	退任	牛尾淳(神社本庁前教化広報部長)
	就任	香取大信(神社本庁教化広報部長)
2. 活動委員 (事務局で推薦、理事会で承認)	退任	三井紳作(神社本庁前教化広報部国際課課長)
	就任	飯塚祥子(神社本庁教化広報部国際課課長)
3. 災害タスクフォースメンバー (任期：2年、理事会で選任)	退任	三井紳作(神社本庁前教化広報部国際課課長)
	就任	飯塚祥子(神社本庁教化広報部国際課課長)

「遺贈寄付」の 受入を始めました

(公財)世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会は、クラウドファンディング等で知られるREADYFOR(レディフォー)株式会社と連携し、遺贈によるご寄付や相続財産のご寄付に関するご相談を承っております。皆さまの大切な想いを、宗教・世代・地域を越えた平和と共生の活動へ確実に活かしてまいります。

■ 遺贈寄付とは ■

ご自身の遺産や相続財産の一部を、社会のために役立てる寄付の方法です。ご家族の想いを大切にしながら、未来の平和づくりに長期的なインパクトをもたらすことができます。

■ 遺贈寄付に関するお問い合わせ ■

1. READYFOR(レディーフォー)遺贈寄付サポート窓口

<お電話でのご相談・資料請求>

0120-948-313 (通話料無料)

受付時間：平日10：00～17：00(年末年始を除く)



WCRP 2025年 秋号

令和7年10月20日発行(季刊発行)第548号

発行人：戸松義晴

発行所：公益財団法人 世界宗教者平和会議日本委員会

〒166-8531 東京都杉並区和田2-7-1(普門メディアセンター内)

TEL：(03) 3384-2337 FAX：(03) 3383-7993

HP：www.wcrp.or.jp E-mail：rfpj-info@wcrp.or.jp

